

平成28年度兵庫県景気動向懇話会結果について

- 1 日 時 平成29年2月21日（火）10:00～12:00
- 2 場 所 兵庫県庁第2号館11階B会議室
- 3 出席者 アドバイザリースタッフ 石川 誠嗣（日本銀行神戸支店営業課長）
尾下 優子（神戸大学大学院海事科学研究科講師）
豊原 法彦（関西学院大学経済学部教授）
丸山 佐和子（神戸大学大学院経済学研究科准教授）

※五十音順

事務局 企画県民部ビジョン局長

企画県民部統計課 課長外4名

産業労働部政策労働局産業政策課 1名

4 議事

（1）景気動向指数の採用指標見直しについて

【主旨・結論】

一致指数の指標として①大口電力消費量、②有効求人倍率、先行指数の指標として③日経商品指数（17種）を採用しているが、それぞれ課題があるため、指標の入れ替えを検討することとした。

①大口電力消費量

電力自由化により、平成28年4月以降、電気事業連合会からの統計が受けられなくなった。また、資源エネルギー庁の統計は平成28年4月以降のみであり、集計単位が異なる。

現行の一致系列採用9系列のうち、大口電力消費量以外の生産活動の指標は、①鉱工業生産指数（C1）と②機械工業生産指数（C4）の2つが採用されていること、また現時点では他に代わる指標がないため、平成28年4月以降分について、「大口電力使用量」を除外し、全8系列とする。

②有効求人倍率

景気動向を反映していないのではないかとの意見があるが、他道府県で採用されている指標のうち、月次統計及び時系列データとして長期間（平成6年～）入手できる指標と有効求人倍率の動きを比較したところ、直近の第15循環における後退期を除くと、有効求人倍率が最も景気動向を反映しており、また現時点では他に代わる指標がないため、国と同様に、引き続き採用することとする。

③日経商品指数（17種）

現在、17種を採用しているのは本県のみであり、17種と42種の兵庫CIのグラフと値の比較をしたところ、42種においても景気の動きを反映していることから、変動の類似性を保ちつつ、商品市況のより全体的な動向を把握できる42種に、平成29年1月分（平成29年3月公表）から、平成6年1月に遡って遡及改訂する。

【主な意見】

- ・ 兵庫経済を取り巻く環境が変化する中で、景気動向を把握する各種の指標を適宜、検討、見直すことは必要である。その際、採用指標自体の統計データの継続性・信頼性・平滑性などが重要となるが、過去の採用指標の変動との類似性も大切な視点と考えられる。

①大口電力消費量について

- ・ 統計データが得られなくなり、採用中止はいたしかたない。
- ・ 東日本大震災後、電力に対するあり方の意味合いが、節電等で変わっている。他に代わる指標がないのであれば、除外でもよい。ただ、系列数が偶数になるので、今後景気判断をする上でヒストリカルDIをみた時に、50が続いたり、50の上と下を行き来することが続いた時に、判断が難しくなるのではと思う。何か候補ができれば追加してもよい。
- ・ データがないので仕方ないところもあるが、貨物の移動量等、トランスポーション系の指標があるといいのかなと思うが、その指標が兵庫であるのかは分からない。偶数より奇数の方がよいと思う。
- ・ C1（鉱工業生産指数）とC4（機械工業生産指数）は同じような動きをしているし、奇数がよいのでまとめてもいいかと思う。
- ・ 皆様が仰る通り、出来れば採用系列は奇数が良いとは思いますが、適切な指標が見当たらないということであれば仕方がないものと思う。仮に指標追加を検討されるのであれば、需要・生産・物流等の動きがより反映され易いと思われる「運輸関連指標」などは確かに面白いかもしれない。

②有効求人倍率について

- ・ 人口構成比の影響など課題があるものの、雇用保険被保険者数などは変動の類似性が薄いので、代替の指標となり難いことは理解できる。今後、全数（一般＋パート）の就職率など、代替の候補となりうる指標のデータの蓄積を待って、再度検討することが考えられる。
- ・ 他の指標より景気は把握しやすいので、引き続き、検討しつつ使う。
- ・ 需給のギャップをつけるような、例えば採用する産業をしぼる等、除外できる方法があればいいと思うが、アイデアは今すぐ浮かばない。
- ・ 公表されているデータは1.18等3桁になっているが、数字の動きが出にくい形になっていて、それが動いてないように感じる印象がある。ただこれは、もともとの有効求人数と求職者数の比率で出しているなので、計算すると細かい数字が出てくるが、本来桁数をもっとあるのがまるめられているので、動きがないように感じるのかと思う。雇用が逼迫しているのがあるが、数値をみる限りでは0.01動いた等、1%オーダーでしか動いておらず、感応性が数値に出てきていないので、指数にした方が実態に近くなるのかと思う。
- ・ 比率なので分子（有効求人数）が動いているから強い、分母（有効求職者数）が動いているから強い、求職者よりも求人数が増えているというのを数字でみた方がいいのかと思うが、

持ち帰って考えたい。

- ・ 近畿2府4県の中でも兵庫県の有効求人倍率は、他府県よりも表面上の比率が低い。これは、例えば兵庫県に本社を置く企業が大阪府で一括して求人を出していることなどが影響している可能性がある。こうした構造上の特性をきちんと把握・認識しながら同指標を使っていけば良いと思う。また、分子（有効求人数）と、分母（有効求職者数）に分けて、それぞれの動きを分析することで、何か経済的に有意義な特徴がみえてくるかもしれない。

③日経商品指数（17種）について

- ・ 変動の類似性を保ちつつ、商品市況のより全体的な動向を把握できことから42種への変更は、景気動向指数の改善につながると考えられる。
- ・ より多くのをカバーして影響を把握できるので問題ないとする。
- ・ 17種より42種の方がたくさんあるが、増えた項目に兵庫らしさがあるのか、わからない。全国の指標なので、1系列しかないのはいいが、加えるのであれば、兵庫県にどのようなメリットがあるかわかれば42種のほうがよいと言えるのではという印象を持った。

(2) 兵庫県版 CLI (Composite Leading Indicators) の計算と分析・活用について

【主旨】

CLIは、3か月の先行性を持ち、例えば、平成29年1月に平成28年11月のデータが公表され、それに基づいて計算されたCLIが3か月の先行性を持つとき、それは平成29年2月の経済状況を予測することになる。

CLIの算出は、兵庫県で採用されている先行系個別指標を用いる。

CLIではブライボッシュン法により山谷を自動的に算出しているもので、実際のものとは異なる。特に踊り場のような小さな山や谷に対して敏感に反応する傾向にある。

CLIは、景気転換について早期のシグナルを与えるように設計されている。生産の初期段階を計測し、経済活動の変化に迅速に反応し、将来の活動に関する期待に感応的であると考えられることから、景気動向に先立った政策立案に有効である。

【主な意見】

- ・ 兵庫CLIの定期的な作成により、兵庫経済の景気転換に関して、早期のシグナルを得ることが可能となり、有用な取り組みと考えられる。

基本、CLIはCIの3ヵ月先行となるが、過去の変換点において、実際の山谷との開差月が長い時と短い時がある。開差月が長い時の経済社会状況、開差月が短い時の経済社会状況を把握し、それぞれの要因、背景、特徴等を把握することにより、CLIによる景気転換のシグナルを得た際、その時期の経済社会状況と照らし合わせ、当該の開差月の長短の見込み、感覚を把握する試みることも可能かもしれない。「踊り場」の特徴など、既にその分析をなさっていると思うが、特に公表する必要はないと考えるが、開差月の長短の見込みに関

しても一層の分析が期待される。

- 景気判断で、C I（兵庫県）は「悪化」、日本銀行神戸支店の基調判断は「改善」と違って、どちらなのかという時に、C L Iで補足説明することができる。C Iと組み合わせると、とても面白いと思う。
- C L Iは、こまめに下方局面を導出しがち。先行指数なので見込みと違うこともあり得るが、将来の見込みの判断に役立つ。自治体の人の判断にも役立つと思う。
- 興味深い研究である。今後、精度向上に努め、各種政策判断等への活用が期待される。